

十勝管内でビートの作付けの際、畑に直接種をまく「直播（ちょくはん）」に切り替える農家が増えている。道農政部のまとめによると直播率は年々上がっており、管内の2019年産では31.7%を記録した。作付面積が増える中、高齢化や人手不足によって作業の効率化が求められているため、今後も直播が増えると考えられる。

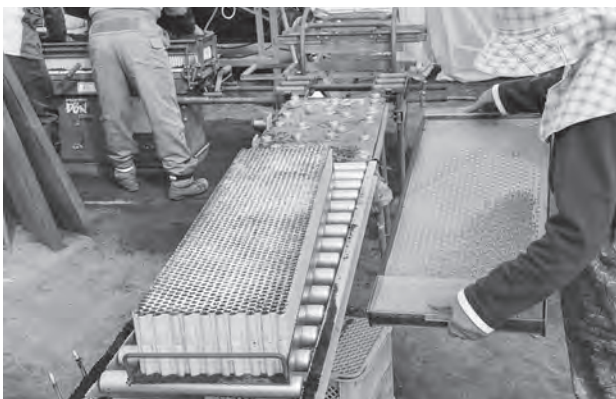
ビートは通常、2月下旬ごろから紙筒に種子をまいて一定期間をハウスで育て、4月中旬以降に畑に移植。ある程度生育してから移すため、風害に耐えられるのがメリット。生育期間を長く取ることで、収量も上がる。

◆労力小麦の4倍

ただ、管内のビート栽培農家は14年の3140戸から19年は2874戸に減少し、それに伴い一戸当たりの作付面積は7.95ヘクタール（14年）から8.62ヘクタール（19年）に拡大。もともとビートは育苗期間を含めると労働時間が長く、農水省統計によると小麦の4倍近い労働時間を要する。加えて高齢化や人手不足の課題もある。

4月中旬ごろに畑に直接種をまく直播は、ハウスでの苗作り作業を短縮でき、移植の手間もかからないため、作業が効率化できる。直播技術の向上に伴って、管内の14年産で19.3%だった直播率は19年産で31.7%まで上昇した。

収穫されたビートを受け入れる3工場における農家の直播率は昨年、日本甜菜製糖芽室製糖所が27.3%、ホクレン清水製糖工場が25%、北海道糖業本別製糖所が49%。いずれも「高齢化や人手の問題があり、ここ数年で増加している」と口をそろえる。



ハウスで育苗をする作業が一般的（写真）な一方で、畑に種を直接まく農家も増えている

◆風害や収量懸念

ただ、直播は風害で種が飛ばされる懸念があるほか、収量安定の面では苗移植に劣る。苗移植を行う管内のビート農家は「人手を考えると直播も考えるが、やはり移植の方が風害に強く、安定して生産できる」と話す。

一戸当たりの作付面積拡大に伴い、直播の比率は今後とも上昇すると考えられるが、道農政部は「風が強い地域など直播に向かない土地もある。安定性を考えて今後も移植栽培を選ぶ農家はいる」と見通す。

19年の全道の直播率は27.9%（前年比2.2ポイント増）。直播への切り替えは（1）移植用の機械が古くなり更新する（2）離農農家の畑を引き受ける（3）代替わりをする一のタイミングが多いという。

